

報告①

鞠智城の位置と調査成果

報告者紹介

亀田 学（かめだ まなぶ）

熊本大学大学院文学研究科修士課程修了

熊本県文化課を経て、現在、熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館勤務。鞠智城跡の発掘調査に従事。

鞠智城の位置と調査成果

熊本県教育委員会 龜田 学

一 古代山城・鞠智城の時期区分と変遷

鞠智城の変遷について見ていきます。まず、I期は鞠智城が築城されたころです。（図1）注目していたいのは、こういう長い建物とそれから官道側、菊鹿盆地の方に向かって建物が建っているのがわかると思います。II期はちょうど鞠智城の修繕の時期にあたります。八角形鼓楼、これは祭祀的な建物とも考えられるのですけれども、それを中心にコの字型の配置をし



鞠智城の変遷
鞠智城 I 期：(7世紀第3四半期～第4四半期)



図1 鞠智城I期
(7世紀第3四半期～第4四半期)

II期：7世紀末～8世紀第1四半期前半・698年の「緒治」の時期。

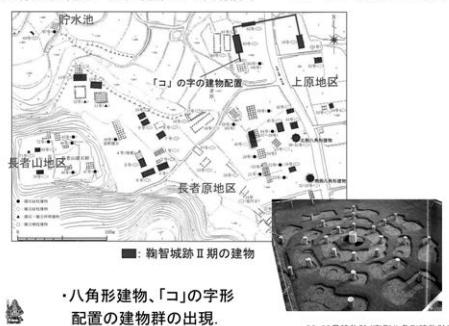


図2 鞠智城II期
(7世紀末～8世紀第1半期)



図3 鞠智城III期
(8世紀第1四半期末～第3半期)



図4 鞠智城III期
(8世紀第4四半期～9世紀第3半期)



図5 9世紀第4半期～
10世紀第3四半期

ているのが特徴です（図2）。それから第III期は礎石建物が出現します。（図3）宮野礎石群という鞠智城が県史跡に指定される契機となつた建物もこの時期にあります。木簡もこの時期だと考えて、います。第IV期は、八世紀第四四半期から九世紀第三四半期にあたりますが、大型の建物が造られるようになります。（図4）それからV期になると、鞠智城の建物がすごく少なくなつてきて、倉庫的機能は継続するものの衰退していく時期にあたります（図5）。鞠智城は防衛的な面、それから、当初から官衙的機能をもつて、それから倉庫的な機能を厚くして、その後倉庫的機能に特化するというような変遷が考えられます。

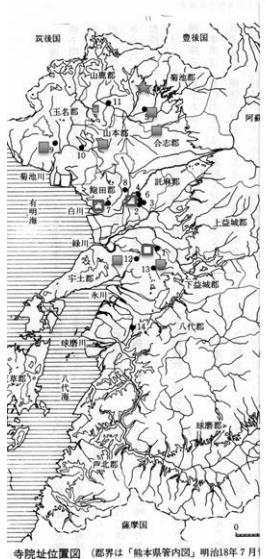


表1 菊池川流域古代集落変遷表

図6 古代寺院分布図（廣瀬正照 1984）と周辺古代遺跡消長表



図7 周辺古代遺跡分布図（菊池市教育委員会2012）

二 鞠智城の位置

(一) 菊池川流域における古墳時代から古代の遺跡の分布

図6右は、これは、菊池川流域の古代集落の出現と終わりを表にしたもので。八世紀後半以降、顕著に

集落が増加し、開発面積が
増えて人口が増えたと考え
られます。

図7は鞠智城周辺の主な

官衙関連遺跡を丸く囲み示
しています。二キロから四
キロの距離にあり、集落が
ネットワークでつながって
いたことが考えられます。

図8は、古墳時代における地域別の前方後円墳の変遷を表にしたもので。

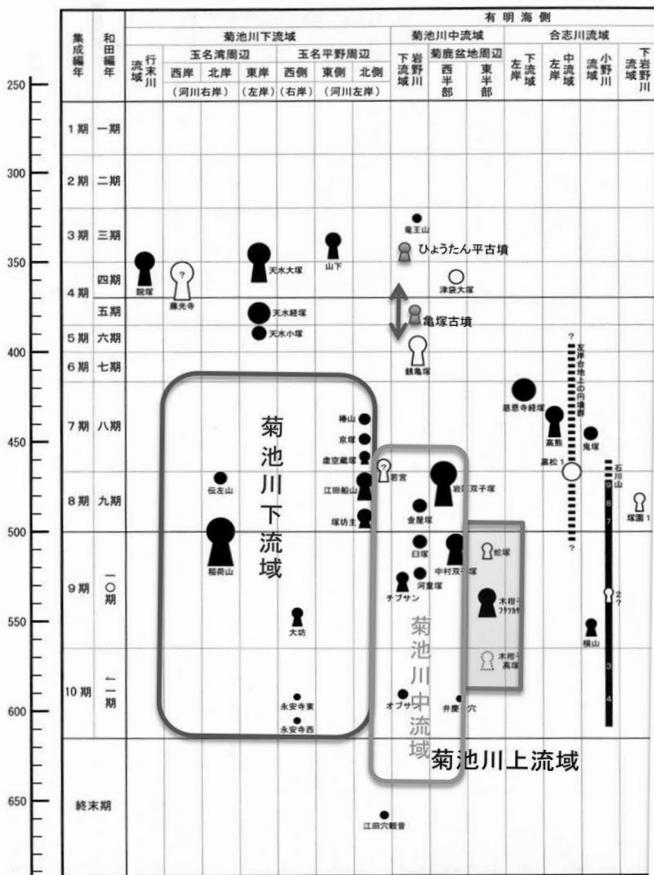


図8 菊池川流域古墳編年図
(杉井 健 2010) 一部抜粋

菊池川下流域には前期から
る地域別の前方後円墳の変
遷を表に示したもので。

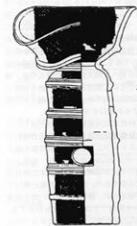
古墳が出現し、その後、江田船山古墳とか大坊古墳とか、それから終末期には切石積の石室の江田穴觀音古墳などの終末期まで継続する中心地域です。中流域にも前期から古墳が出現し、中期には亀塚古墳など舟形石棺や大きな石棺を持つ古墳や岩原双子塚古墳が築かれ、後期には中村双子塚古墳、それから横穴や横穴群などがあらわれる地域です。それに対して上流域では、前期から中期にかけては中小の古墳が多く、後期になつて前方後円墳が現れます。



図9 肥後地域寺院・官衙分布図
(廣瀬正照 1984)

図9は、郡衙や国衙の位置を示したもので、まず、菊池川下流域では、玉名郡衙、立願寺廢寺などのほか、八世紀後半になると小岱山麓の製鉄や拠点的集落である柳町遺跡、松尾平遺跡などが出現します。中流域には、桜町遺跡や様相はよくわかつていませんが山鹿郡衙推定地、それと郡寺と推定されている中村廢寺があります。また、方保田東原遺跡や御宇田遺跡群など拠点的な遺跡や官衙的な性格をもつた集落が出現します。上流域では、菊池郡衙推定地である西寺遺跡や八世紀後半の瓦が出土した十連寺廢寺など、また正觀寺には礎石群が残っています。その他、拠点的集落も當まれています。

鞠智城は菊池川上流域、菊鹿盆地の東端に位置し、下流域や中流域の玉名郡や山鹿郡の後背地に選地され



TK208 例行程度か
八女市町崎2号墳
八女市立山2号墳
山鹿市金屋塚古墳



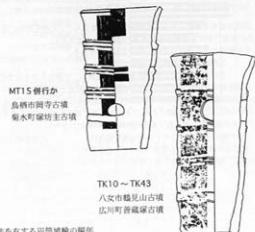
TK23 例行
筑後市欠坂古墳

水系	所在地	古墳名	墳形	径
菊池川下流域	和水町	塚坊主古墳	前方後円墳	44
菊池川中流域	山鹿市	チブサン古墳	前方後円墳	45
	山鹿市	金屋塚古墳		
矢部川流域	八女市	釣崎2号墳	前方後円墳	45
	八女市	鶴見山古墳	前方後円墳	104(87)
	八女郡広川町	善藏塚古墳	前方後円墳	90
筑後川流域	筑後市	欠塚古墳	前方後円墳	45
	鳥栖市	岡寺古墳	前方後円墳	65
	鳥栖市	庚申堂塚古墳	前方後円墳	60

表 円筒埴輪押圧技法出土主要古墳

* 岸本圭「九州の埴輪 その変遷と地域性」2000

九州前方後円墳研究会



MT15 朝倉
山鹿市鶴見山古墳
和水町塚坊主古墳

畿内地方と共通する技法

→ 筑後地方とのつながり

筑後地方と共通の技法



TK10～TK43
八女市朝倉
広川町善藏塚古墳

第16図 押圧技法を有する円筒埴輪の編年

図10 押圧技法を有する円筒埴輪の編年（岸本 圭 2000）

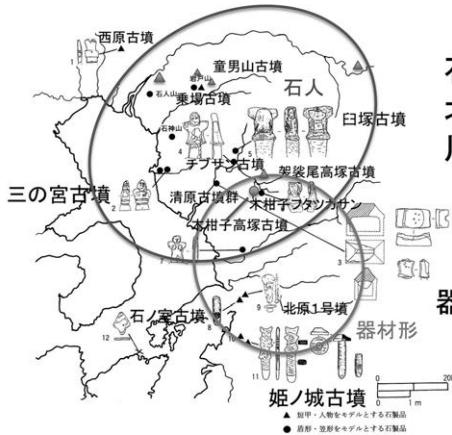
品は、当該地域を中心に分布しています。（図11）熊
また、一〇〇体以上の石製表飾品をもつことで有名
な）福岡県八女市に岩戸山古墳があります。石製表飾
品は、当該地域を中心に分布しています。（図11）熊

たことが重要であると考えられます。菊池川水系上流域に合志川がありますが、それらの背後に位置していることも重要な点だと考えています。

(二) 技術からみた筑後地域との関わり

菊池川流域は、筑後地域との関係性が密接な地域です。図10は、埴輪の技法について表した図です。埴輪というのは帯状にいくつか突帯を持っているのですけれども、その最下段に、指で押し付けるような技法つまり、押圧技法を施します。そういういた技法が山鹿市のチブサン古墳や金屋塚古墳などの埴輪にあるのですけれども、同様の技法が筑後地域矢部川流域や筑後川流域に分布していることから筑後地方との関係性がわかります。

また、一〇〇体以上の石製表飾品をもつことで有名な）福岡県八女市に岩戸山古墳があります。石製表飾品は、当該地域を中心に分布しています。（図11）熊



第1図 肥前後の石製品分布図

石製表飾品は筑後や熊本県北部地域菊池川流域と氷川流域に分布する。

石人は北を中心に分布

器材形は氷川流域を中心に分布

図 11 肥前・肥後の石製品分布図（高木 恭二 1994）



図16 垂飾付耳飾からみた九州地域の地域性

(5世紀後半～6世紀前半)

(古墳時代の日韓交流－熊本の古墳文化をさぐる－)
(肥後考古学会・熊本古墳研究会)2002



図 13 垂飾付耳飾からみた九州地域の地域性（高田貫太 2002）

図 12 肥後主要な石屋形を有する古墳分布図（宇野慎敏 2010）

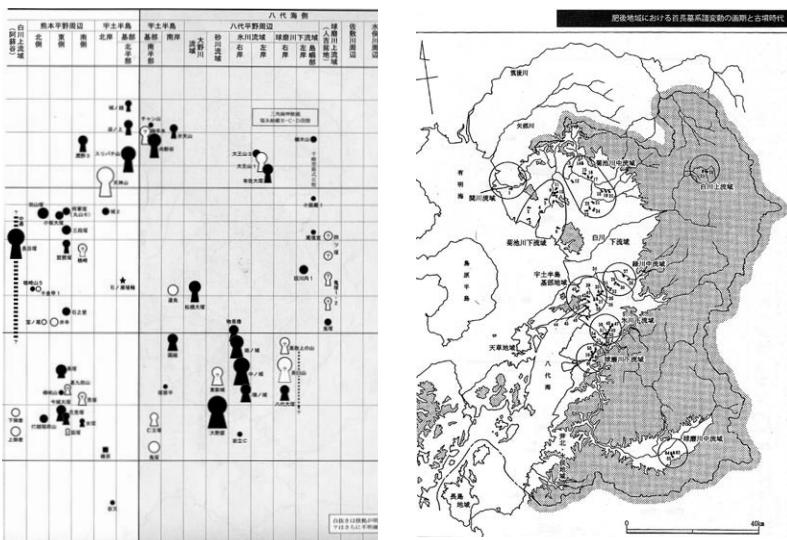


図15 肥後南部の主要古墳の編年 (杉井 健 2010)

図14 肥後地域における前方後円墳の分布 (杉井 健 2010)

本県内の出土状況で重要なことは、北部では短甲形を含めて人形（ひとがた）の石人が分布し、南部には盾形などの器材形が多いという特徴があり、共通する文化圏であるものの石製表飾品の在り方に違いがあることがわかりります。

図12は、石室の奥に作られた開放された埋葬施設を「石屋形」というのですけれど、そのうち屋根が平たいたものをA型、家形をするものをB型と分類しています。これらの石屋形は、類型ごとの分布の偏りはなく筑後地方を含み、菊池川流域を中心に分布していることがわかります。（図13）垂飾付耳飾りが有明海沿岸を中心には分布しており、菊池川下流域の大坊古墳や江田船山古墳、伝左山古墳で出土しています。このことも筑後地方との関係が密接であることを示すものと考えられます。

図17は、肥後地域の瓦の変遷図です。瓦は寺院や官衙などに用いられるもので、それらの変遷が手がかりとなります。古い瓦としては、玉名郡の立願寺廃寺や、益城郡の陣内廃寺などがあげられます。また、八代

図14・15は、肥後地域の前方後円墳の分布をしたもので、鞠智城から東側の古墳時代中期には白川流域の阿蘇地域や中通古墳、緑川流域には塚原古墳群や松橋大塚古墳、氷川流域には野津古墳群があり、それぞれの地域に首長墓が営まれていることがわかります。特に六世紀中葉の全長二二〇メートルを超える大野窟古墳（図16）は、石室の天井高が六・五mで、日本でも最大級の石室規模を有している。

（三）肥後にける勢力分布と鞠智城

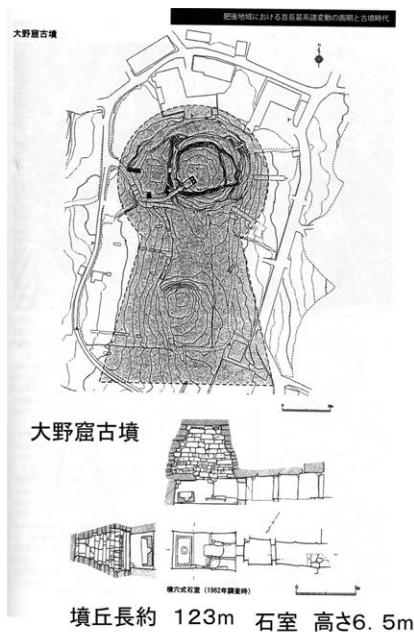


図 16 大野窟古墳
(杉井 健 2010)

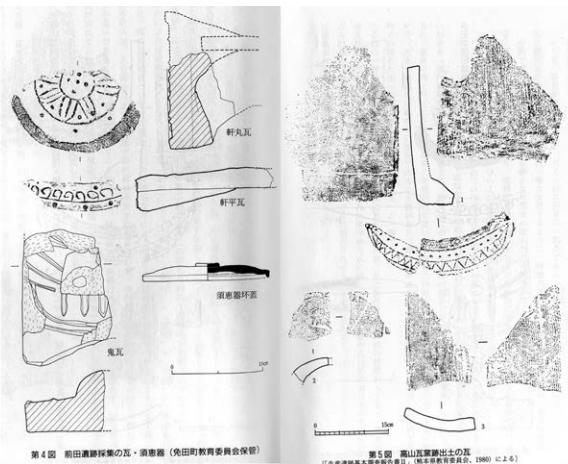


図 18 左 前田遺跡 右 高山瓦窯跡
出土遺物 (須恵村 1955)

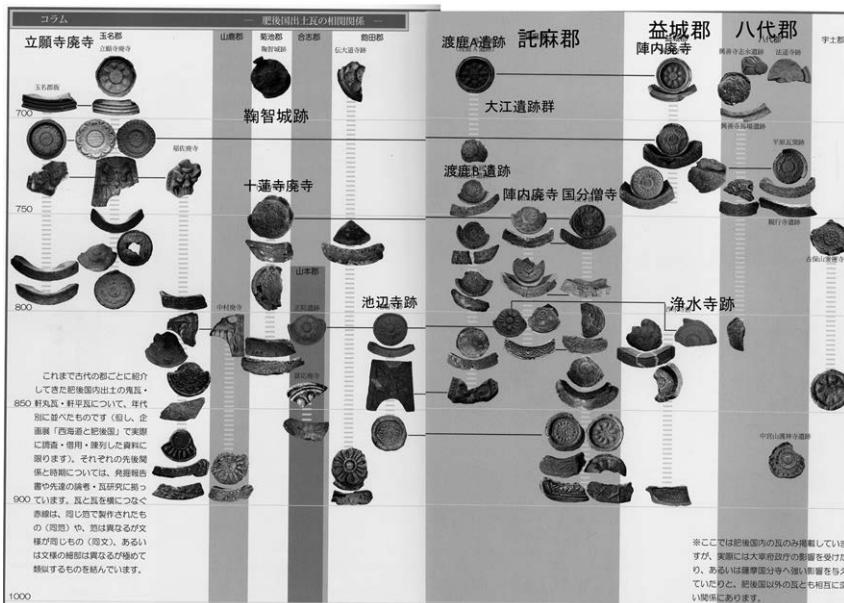


図 17 郡単位の肥後国出土瓦の編年表（熊本市立博物館 2011）

郡には单弁の特徴的な瓦が出土しており、独自の瓦を供給する強い基盤をもった勢力が存在したと考えられます。

肥後国全体の地域の中で周辺部分に位置する球磨地域ですけれども、前田遺跡では九世紀代の軒丸瓦や軒平瓦、鬼瓦が表採され、郡衙関連や寺院跡と考えられ（図18左）、また下り山窯跡など奈良時代の須恵器窯もあり（図18右）、重要な地域といえます。あさぎり町の才園古墳などでは、金のメッキを施した鏡も出土しており、また錦町には前方後円墳の亀塚古墳群が営まれています。この外、肥後国には古墳時代以来、それぞれの郡や小規模なエリアごとに有力豪族がいたことがわかつており、独自の文化や豪族の存在は律令体制を整える上で有意に働いたものと思われます。軍事目的が薄れた後の鞠智城は、律令制を施行する上

には单弁の特徴的な瓦が出土しており、独自の瓦を供給する強い基盤をもった勢力が存在したと考えられます。

肥後国全体の地域の中で周辺部分に位置する球磨地域ですけれども、前田遺跡では九世紀代の軒丸瓦や軒平瓦、鬼瓦が表採され、郡衙関連や寺院跡と考えられ（図18左）、また下り山窯跡など奈良時代の須恵器窯もあり（図18右）、重要な地域といえます。あさぎり町の才園古墳などでは、金のメッキを施した鏡も出土しており、また錦町には前方後円墳の亀塚古墳群が営まれています。この外、肥後国には古墳時代以来、それぞれの郡や小規模なエリアごとに有力豪族がいたことがわかつおり、独自の文化や豪族の存在は律令体制を整える上で有意に働いたものと思われます。軍事目的が薄れた後の鞠智城は、律令制を施行する上

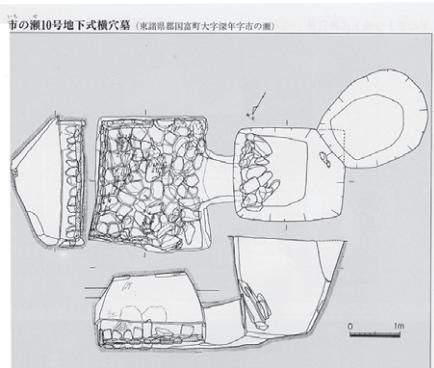


図 22 市の瀬地下式横穴 10 号
(国富町教育委員会) 1986

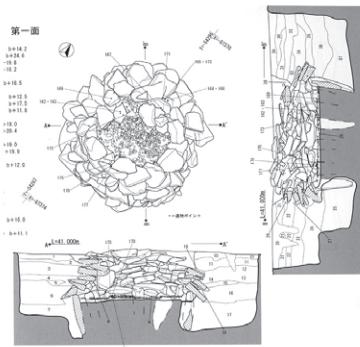


図 21 北園上野古墳群

で拠点的機能を果たしたのではないかと考えられます。

図19は古墳時代の道路を示したものです（中原二〇〇一）。中原幹彦氏が提唱された植木東路、植木西路で、古墳時代の遺跡を繋げるよう分布しています。このようなルートが古代でも使われた可能性が考えられます。鞠智城の東側にも車路（くるまじ）が想定されていますので、そういうルートで文化が伝承し、また支配も進れていました。



図 19 古墳時代遺跡分布図
(中原幹彦 2002)

志布志湾・肝属平野 都城盆地 宮崎平野南部(大淀川) 宮崎平野北部(一ツ瀬川・小丸川)

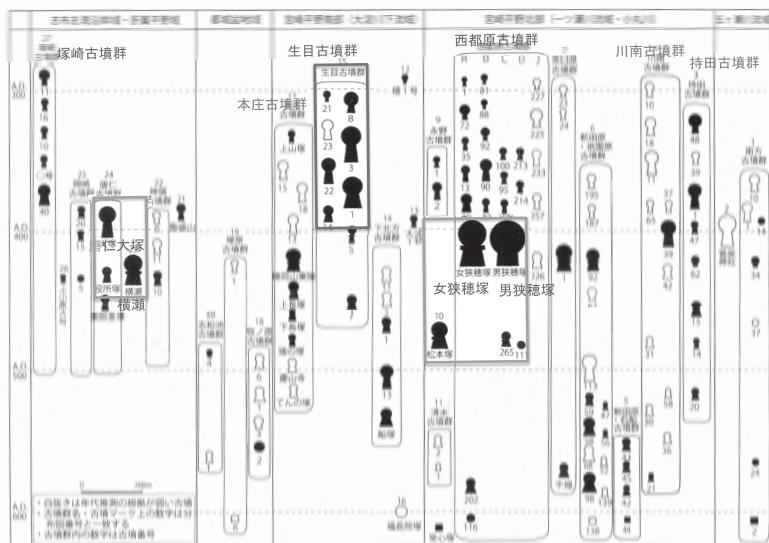


図 23 南九州の主要首長墓群の変遷 (柳澤一男 2015)

んでいたのではないかと考えています。図 20 は上

村俊雄氏が想定する古墳文化の流入ルートです。延喜式の駅路が整備されるまでは車路や古墳時代の遺跡や古墳をつなぐ主要なルートとして利用され、その後、律令制の整備にも利用されたと考えられます。

(四) 南九州と鞠智城

南九州には、墳丘をもつ古墳以外に地下式板石積石室墓（図21）や地下式横穴（図22）という墓制が



図 20 畿内型古墳文化の流入ルート (上村 2006)

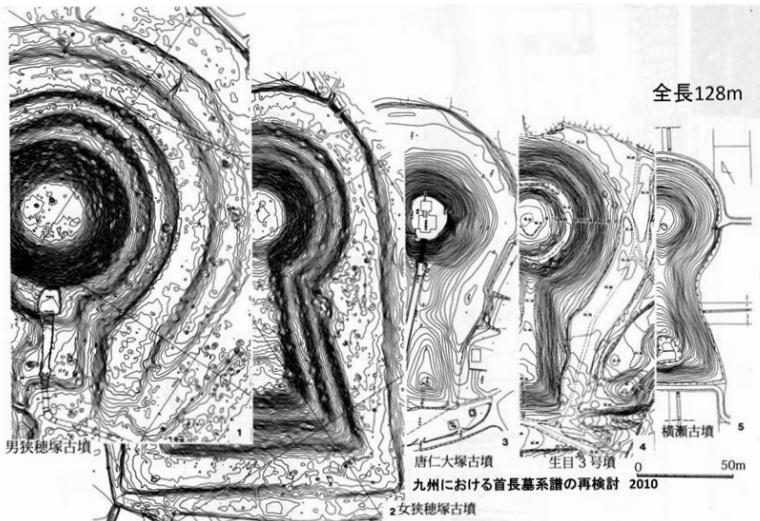


図24 九州5大古墳（橋本達也 2010）

あります。古墳時代中期を中心こういった独自の文化を築いていたことがわかつています。

（柳沢二〇一五）。古墳時代前期に宮崎平野南部の大淀川下流域に生目古墳群や志布志湾沿岸・肝属平野に塚崎古墳、中期に唐仁大塚古墳、一つ瀬川流域の西都原古墳群に女狭穂塚古墳、男狭穂塚古墳など九州最大級の前方後円墳が築かれます。

図24は古墳の大きさを比較したものです。北部九州最大の岩戸山古墳は全長一三五mですので、九州最大の古墳は南九州に集中し築造されていることがわかります。

また、江田船山古墳から出土した画文帶神獸鏡の同型鏡や国越古墳出土の画文帶神獸鏡の同型鏡が、持田古墳群や新田原古墳群に副葬されていることは肥後国と南九州との関係を示すものといえます。

図25は、九州全体図で国府の位置を示したもので近く



図 26 日向国分寺の瓦
(九州歴史資料館 1984)

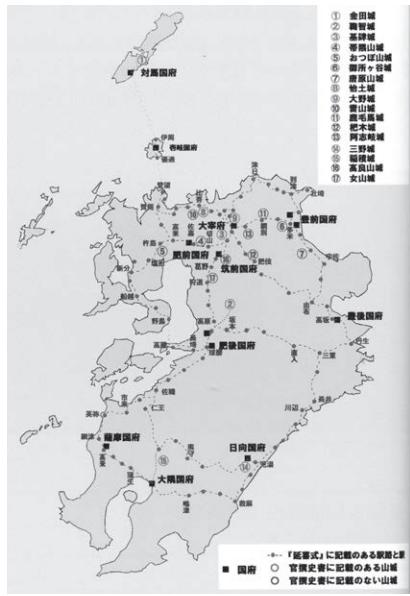


図 25 西海道所有の古代山城と
国府 (鹿児島県歴史・
美術センター黎明館 2020)

には国分寺があります。

図 26 の日向国分寺の瓦は、肥後国や大隅国分寺の影響がみられると考えられます。九州内の特定の地域の系譜を辿るのは難しいといいます。平瓦の平行条線や、それから途切れ途切れの縄目タタキを残すものも在地的な要素が強いものであるといえます。

図 27 大隅国分寺の瓦は、日向国分寺や肥後

国分寺の影響を受けており、斜め格子のタタキをもつ平瓦などは筑前や肥前などの技法の影響がみられます。薩摩国分寺の瓦は肥後国分寺の影響が強いといわれ、創建時の軒丸瓦は肥後国分寺に、軒平瓦については豊前国分寺の瓦当とつながりが深いといわれています。隼人の乱以降による豊前国からの移住などの問題に関係するかもしません。

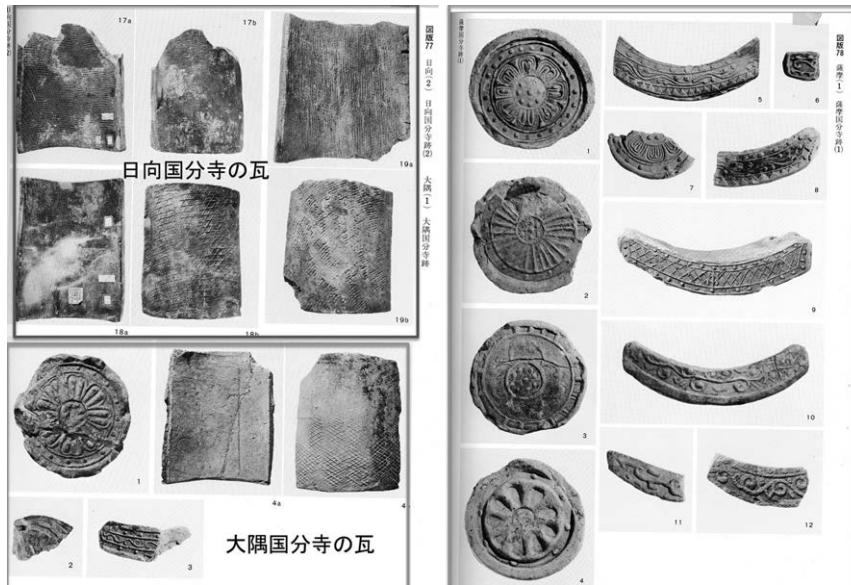


図 27 日向国分寺・大隅国分寺瓦（九州歴史資料館 1984）

肥後國府の構造は不明ですが、日向国では図28のように國府の調査がなされています。七世紀終わりから八世紀段階で國府が整備されていることがわかつています。単弁八葉連偈文の軒丸瓦とか、役人が使う腰帶の飾りなども出土しており、周辺部分の官衙遺構も含めて注目されているところです。

三 周辺地域からみた鞠智城の位置

鞠智城が所在する菊池川上流域は、中・下流域の有力な豪族の後背地に選地しているのではないかと考えています。また、筑後地方とかなり強い繋がりをもち、その影響域の南端に位置する場所が選ばれた可能性が考えられます。以上の点から鞠智城は、軍事目的と合わせて地域支配の拠点的施設として營まれたことが想定できるのではないかと考えます。

鞠智城は築造当初から日向、大隅、薩摩等の南九州

に対する大宰府からの中継地点として、地域的つながりをもちながら、地方支配に向けた役割があつたのではないかと思われます。

本来は最近の調査成果を少しお話するところなのですが、それでも、時間の関係でパネル展示を見ていただいきたいと思います。以上で私の発表を終わりたいと思います。

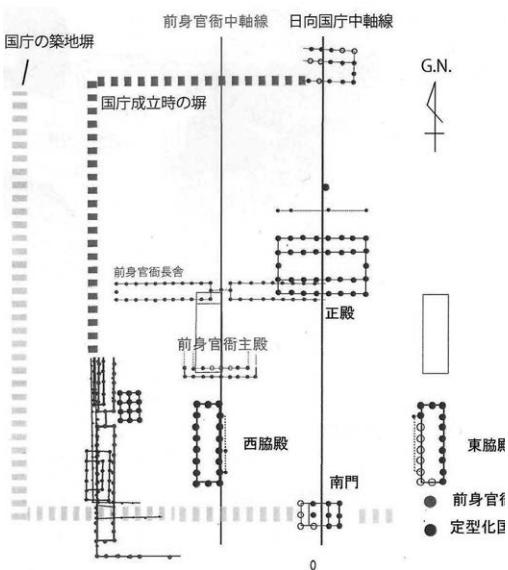
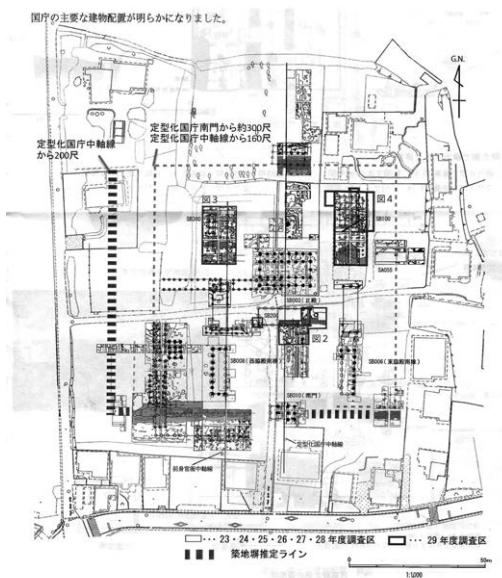


図 28 平成 29 年度国指定史跡日向國府跡 発掘調査現地説明会資料 2017